日本ナイル・エチオピア学会第16回学術大会
パネルディスカッション

環境から見るナイル・エチオピア

日 時
2007年4月14日(土)
場 所
慶應義塾大学　湘南藤沢キャンパスΩ22大講義室

解　題　■林　玲子

今日，持続可能な環境がきわめて大きな課題となりつつあるが，砂漠地帯を抱え，自然条件の厳しいナイル川流域ならびにエチオピア一帯には，それを乗り越える新たな環境計画の考え方が必要である。日本ナイル・エチオピア学会第16回学術大会のパネルディスカッションでは，地球環境から等身大のスケールまで視点を変えながらナイル・エチオピア地域に着目し，古代から今日までを横断する長い歴史観とともに未来を見据える眼をもってこの地域のポテンシャルを探ることを目的とした。リモートセンシング，農業技術，建築学，考古学を横断して広く議論を交わし，地域の新たなビジョンの形成を試みた。　（セネガル共和国保健予防省）

基　調　講　演

エチオピアの歴史遺産とその保護
ジャラ・ハイレマリアム（エチオピア文化遺産庁長官）

旱魃・砂漠化とナイル川
ムーサ・モハメド・オマール（前駐日スーダン大使）

パネルディスカッション ── 環境から見るナイル・エチオピア

巨大河川ナイル
－水・変動－
春山成子（東京大学大学院新領域創成科学研究科）

砂漠緑化へのチャレンジ
－ジブチ共和国での試み－
飯山禮文（東京農業大学国際協力センター）

古都ゴンダールの歴史的環境
設楽知弘（慶應義塾大学SFC研究所）

気候変動とナイルの文明
辻村純代（国士舘大学イラク古代文化研究所）

ま と め
林　玲子（セネガル共和国保健予防省）

基調講演

エチオピアの歴史遺産とその保護

ジャラ・ハイレマリアム

エチオピアは先史時代から近代に至るまでの多数の遺産があることで知られているが，何よりも人類の発祥の地として知られている。人類の文化はまさにここに端を発しているわけである。世界に14件保存されている最古の化石人骨のうち10件がエチオピアで発見されたことからも，そのことが理解できるだろう。

歴史時代に入ってからは，紀元前の千年紀の間に造られた建造物，オベリスク，彫刻，貨幣，墓廟，金属製品，ガラス製品などが国内各地に散在している。世俗の歴史的建造物だけではない，宗教遺産もこの国の文化財の主要な部分をかたちづくっている。つまり，聖跡，モニュメント，建造物，礼拝の場などがそうである。他に較べようのないすぐれた宗教作品，聖具，ミニアチュールが施された写本といった芸術品が，過去の芸術家や職人の手によって創り出され，さらに驚くべきことには，今でも教会の儀式でそれらが普通に用いられているのだ。われわれの先祖は，創造力を駆使して皮革製品，籠，金具，銀製品，宝石などをつくり出し，その伝統を今日に伝えてきた。あまたある文化財の中には，ユネスコの世界文化遺産リストに登録されているものが８件もあり，アフリカでもトップクラスの歴史文化を示しているといえるだろう。

✦前アクスーム朝時代

上に指摘したように，エチオピアの文化財は先史時代にさかのぼる。歴史の記録が登場するのは前アクスーム朝時代である。発見された古代の碑文は,ダマート語，サバ語，ギリシア語，ゲーズ語の４言語で記され，時代的には紀元前500年から紀元550年の約1000年間に分布している。これらはオランダとルクセンブルグの碑文学者ドルーワース教授とシュナイダー教授(1917～2002年)によって解読，翻訳，編纂された。紀元前の千年紀のアクスームでは，古代先住民による独自の国家が成立していたことがわかっており，その中でもっとも古いダマート文明は，今日のティグレ州からエリトリアにかけて広がり,独自の文字や言語，経済と文化，宗教と神々，政治システム，王と王妃，エチオピア・イベックス(山羊)をかたどったシンボルを生み出した。その後，ダマート文明はアクスーム文明に交替し，版図を広げてアフリカとアジアにまたがる大帝国として紀元100年から600年まで続いた。

✦アクスーム朝王国

アクスーム朝の発展期はエチオピアにおける文化的，政治的，環境的な大転換点であった。紀元前3000年から始まった長い社会的経済的な変動の到達点がまさにこの時代であり，西部の低地地帯，海岸部，高地地帯の全域にわたって人々を組み込んでいった。またこの時代にキリスト教国家の礎が築かれ，その国家が徐々に南進を遂げて，19世紀後半のメネリック２世に至って頂点をきわめる。

一般に認められているエチオピア最古の王朝は約2000年前から現在のアクスームの北側を占めるようになった。その最盛期(４～７世紀)になると，アクスーム朝は，今日のスーダンに位置するメロエ王国からアラビア半島のメッカに至る，広大な版図を誇るようになった。紅海沿岸の港町アドゥリス(現在のエリトリア)は，海洋に進出した王国に軍事的な優位性をもたらすうえで大きく貢献した。

しかし，アクスームはその世界的な知名度にも

かかわらず，研究がそれほど進められておらず，発掘件数も少ない。同様の理由で，エチオピアの諸都市は人々の見聞や見かけの情報を混ぜあわせて評価が下されてきた。そのため，時間軸に沿った体系的な歴史把握にはまだ至っていない。紀元前2500年から紀元前1000年を対象とする旧石器時代の考古学，あるいは歴史学の分野において実質的に解明されている部分は少ない。この時代は五つの文化期に区分されているが，その名称と時代区分は学者によって異なっている。

古代世界においてエチオピアは，エジプトのファラオたちによって語られた神話の世界に登場する伝説の土地プントであった。ホメロスもその叙事詩の中でエチオピアをうたっている。大方のギリシア人はエチオピアを天使が羽を休める場所としていた。

今の段階では，歴史上の年代判定に際して，確証がないまま仮定で判定を行っているという意味で，陶磁器の鑑定のようなやり方でことを済ませている。だから，将来的に年代が変わってくることは大いにありうる話である。本来，年代の判定は科学的な方法で，考古学的にいえば層位学的に行わなければならず，それに用いられた出典の根拠，あるいは適用した方法を科学的に検証して，確実な結果だけを用いるべきであろう。

✦タナ湖の教会と修道院

14世紀から16世紀にかけてタナ湖一帯が，外部の圧力に抗してキリスト教の信仰を守るという意味で，大きな役割を果たすようになる。ソロモン朝が勃興してこの地域で教会建設を進め，修道院の保護者となるのである。ソロモン朝初期の古文書や宗教芸術作品，さらには王室の宝物は，現在に至るまで宝物庫の中にきちんと保存されている。さらに新たな教会芸術が開花し，教会堂の中を埋めている。

40余りあるタナ湖一帯の教会のうち，古いものは14世紀に創建されている。円形平面の聖堂は，伝統的な建築技術や空間，材料をそのまま映し出しているといってもよい。聖堂を構成するのは，マクダス(至聖所)，ケデスト(身廊)，カネ・マハレト(周回廊)と同心円状に広がる三つの空間である。至聖所の外壁は一面に色彩豊かな壁画を描くのが一般的である。

✦ゴンダール城と宮廷

13世紀から17世紀にかけて，エチオピアでは戦乱が続いた。そのため君主たちの宮廷は常に各地を移動していた。1636年になってファシル王がゴンダールに居城をかまえ，その地を都となし，移動の時代に終止符を打った。

ファシル王に続く王たちは造営事業を継続し，建築技術を進化させ，スタイルを洗練させた。凋落の時期を迎える18世紀後半までに，移動宮廷から始まった宮廷建築は，全長900メートルに及ぶ城壁を構え，その中に順次建設された6棟の城館を核とする城塞型の宮殿「ファシル・ゲビ」を成立させるまでに至った。ゴンダールの内外には，このファシル・ゲビ以外に約20の宮殿と他の宮廷建築，さらには30余りの教会建築が建っている。16世紀から18世紀を通して，あまたの工芸品，絵画，文学，音楽が生み出され，宮廷文化が花開くのである。

✦ティヤ

アディスアベバの南，アワシュ川上流の地域には驚くほど沢山の考古学遺跡がある。何千もの切り出されたオベリスク，160万年前にさかのぼるメルカ・クントゥレの先史遺跡，アダディ・マリアムの岩窟聖堂などがその代表である。アダディ・マリアムは，南部のキリスト教文化が始まる600年前の状況を映し出した貴重な宗教遺構である。

オベリスクに関する限り，その最大の集積はティヤの村の近くに認められる。当初は64基のオベリスクが建てられており，今日修復事業を経て，おおむね往時の姿を取り戻した。発掘の結果，ここには多くの墓があったことが確認された。ティヤのオベリスクはしなった刀の形をしており，他の地方のものとは趣を異にしている。古代には巨大なモニュメントの建造が各地にみられたが，このティヤに関する限り，その建立年代は確定されていない。

✦ラリベラと岩窟聖堂

アクスーム朝が滅びた後，12世紀になって政治権力の中心はラスタ地方のロハの地に移った。ザグウェ朝の勃興であり，後にラリベラと名づけられる場所が王たちの居住地となって，100年間ほど続いた。伝説の王ラリベラ(1181～1224年)は，

この地に11の岩窟聖堂を建立したとされ，そのことで歴史に名を留める。これらの聖堂は，赤色火山岩と黒ずんだ玄武岩が織りなす岩盤に深く掘り込まれている。それぞれの聖堂は重なりあった通路やトンネルで結ばれ，そのあちこちに隠修士のための洞窟やカタコンブが穴を開けている。いずれもバシリカ形式で，初期キリスト教の形式を模しているが，デザインやスタイルはそれぞれ相互に異なっている。内部には特徴的な壁画が描かれ，抜群の表現技法を示している。

✦歴史都市ハラール

ハラールは今日，ハラール州政府の所在地で，アディスアベバから東に520キロのところに位置している。一帯は砂漠の果てに山並が続き，一部サバンナを擁した地形が特徴的である。ハラールの町自体は丘の上の見晴らしの良い地点を選び，丘の下を渓谷になって川が流れているので，見た眼に迫力がある。土地は肥沃で，その昔から人々を引きつけてきた。中世の市壁で囲まれた街となっているのが特徴的で，イスラーム世界でもっとも聖なる土地として崇められてきた。20世紀に入って町の規模が拡大し，今日，古い歴史都市と新しい市街地のふたつの地区に区分されている。

ハラールの特徴は，町並みのひとつひとつが面白いということだけではなく，その全体のかたちにある。城壁都市として歴史的な形態を今日まで保持しているという点で，エチオピアの他のより古い町以上に古さを保った町であるということだ。文化，建築の手法，ライフスタイル，宗教の分布のどれをとっても多様であり，それがこの町をして，エチオピア文化の生きた博物館，と言わしめる所以である。ただ，個人住宅も町全体も維持管理が適切になされておらず，公共施設やインフラも不十分なので，全体としてはまだ荒れた印象を与えるかもしれない。

✦文化遺産保護

以上の点を踏まえて，エチオピアで進行中の文化遺産の研究，保存修復，その他関連プロジェクトについて論を進めたい。

エチオピアでは文化遺産に関する事業は文化観光省の下にある文化遺産庁(ARCCH)が所管している。私はその長官のポストにある。文化遺産庁の目的は以下のように整理される。

(1) 科学的な調査にもとづいて文化遺産の登録を行い，監督する。
(2) 人為ならびに自然災害から文化遺産を保護する。
(3) 文化遺産が国の経済的社会的発展に利するように活用する。
(4) 文化財を発見し研究する。

上記の目的を達成するために文化遺産庁には六つの部局が設けられている。国立美術館，考古学・古人類学局，文化人類学局，保存修復局，登録監督局，文化遺産研究局である。

✦文化遺産保護の基本ガイドライン

ガイドラインの基本はすべて2000年6月27日に定められた「文化遺産の研究と保存に関する宣言209/2000」を根拠としている。登録に関してみると，宣言の第2部第17条2節において示された，「文化遺産庁が文化遺産に関する親権と保存の権限を有する」という条項が根拠となって，文化遺産庁に遺産の登録を実施する役割を与えている。実質的に文化遺産庁は各州の文化局との協力体制を敷いて登録事業を推進している。国規模での登録リストを完成させるためには，対象となるそれぞれの物件に関して審査書類が必要となるが，それを作成するのが文化遺産庁の登録監督局である。また，各州の間で同一レベルの情報共有を行い，遺産マネージメントの内容についても共通の理解が必要となるが，そのツールとして現在コアデータ・インデックス・フォーマットを立ち上げつつある。

情報を集め整理しても，そのデータに自由にアクセスして利用できるようになっていなければ意味がない。そこで文化遺産庁では，文化遺産の必要データを集め利用可能にしたデータベースを作っている(データベースは建造物と作品のふたつのカテゴリーに分けられている)。

昨今，今まで見られなかったほどの勢いでアフリカの文化遺産に対する関心が，国際的にも国内的にも増加しており，エチオピアの文化遺産には，特に世界中の注目が集まっている。国際的な機関，たとえばユネスコ，EU，世界銀行などがエチオピア政府と全面的な協力体制を敷き，さまざまな文化遺産保護のためのプロジェクトに拠出する資

金も年を追って増加している。ユネスコの世界遺産に登録された場所では，とりわけ多くの技術的，物質的な支援がなされており，場合によっては遺産保護をより科学的に進めるための研究ラボのような基幹施設をつくるまでになっている。

現在，もっとも力を入れているのは，イタリア軍が持ち去ったアクスームのオベリスクの返還と再建事業である。このオベリスクは当然もとの場所に再建されなければならない。次のユネスコ総会においてわれわれの提案が受け入れられ，この事業の実現のために最大限の支援をいただけると確信している。　（エチオピア文化遺産庁長官）

旱魃・砂漠化とナイル川

ムーサ・モハメド・オマール

「砂漠」というとひどくロマンティックな響きをもつが，「砂漠化」といわれると逆にそら恐ろしい。みずからが存する環境の劣化を食い止めることは，人間にとって当然の務めである。サハラ以南のアフリカ諸国は，自然のままに広がる広大な土地を抱えているにもかかわらず，薪を切り出すだけの森林伐採，大規模な農園開発，さらには家畜の放牧が，土壌と樹木に多大の損失を与えていることを知らなければならない。本来，手つかずの未開発地域こそが，地球を覆う自然系の均衡を保つうえで決定的な役割を果たしているのだが，そこに住んでいる人たちは，日常生活に必要だからと言って往々にしてその土地の環境を損ねてしまうものだ。

水は生命を持続させる。だから，豊富な水資源をもつ国は高度の発展を享受することができる。ナイル川はその水系に住む人々に多大の恩恵をもたらしてきた。世界最古の文明がこの川の周りに繁栄したのである。スーダンを例にとってみると，ナイル川は南北の国境間の2200キロにわたって流れている。近年，石油が発見されるまで，スーダンの経済は農業と遊牧民による牧畜生活が基盤であった。ハルツームの南にある青ナイルと白ナイルに挟まれたゲゼイラ平原は，ひとつの管理機構に属しているという意味では，世界でもっとも広い灌漑農場となっており，４万平方キロにわたって広がる水路のネットワークが，高低差を利用した水の流れで潤っている。ナイル川の定期的な増水と時折の雨がこの地域の天水農業を成立させているのだ。

スーダン北部の国境地帯は，南部の多雨の赤道地帯と違って，雨もほとんど降らない。言い換えれば，この国には広大な砂漠と湿潤な湖沼地帯の両方が存在しているわけだ。スッドは世界最大の熱帯性湿地である。スーダン中央部のベルト地帯には多様な生物種が集中している。この地域では長い夏の間のわずかの期間に雨が一気に降り，それだけで年間の400ミリから700ミリの雨量のほとんどを占める。他地域によく見られる動物の病気がないので，この地域は動物の生育に最適といえよう。スーダン西部はアフリカでも最大の地下水脈を有しているが，そこに住む部族が常に水を求めて動きまわる遊牧生活を送っているのは，いかにも逆説的である。

人間と動物の数が増してくるにともなって，スーダン西部では季節移動ルートの確保と農地の耕作をめぐって，遊牧民と農耕民の対立が発生するようになった。さらに悪いことには，気候変動の結果，1984年に大規模な旱魃が発生し，多くの動物が死に絶え，この国でも最大の人口移動を促した。この地を去った家族たちはナイル川をめざしたのである。

スーダン中央部ならびに東部の広大な平野は天水農業に適している。とはいえ，この土地の中で実際に農地として用いられているのは，すべてを合算しても3000万エーカーにしかならず，このエリアの全農耕可能地の１割にすぎない。これだけ